ユニット 1-B：インド的歴史観（ver3.3）

ねらい

古代インド人は、この世界（宇宙）の始まり・変化・終わりについて、独特の「歴史」観を作り上げた。ここで「歴史」というのは、現実の出来事の継起という意味ではなく、神々と英雄をめぐる語りにおいて語られる過去から未来にいたる時空間（time-space）のことである。このユニットでは、東南アジアにも多大な影響を及ぼしたインド的歴史観について、主としてヒンドゥー教の視点から概観する。あわせて、神々の物語の代表として乳海撹拌を検討する。

1. ヒンドゥー教の神々

- ヴェーダの神々：バラモン教の神々。自然現象の神格化。例：アグニ神（火神）、ヴァーユ神（風神）、スーリヤ神（太陽神）、インドラ神（帝釈天、雷神）。
- 叙事詩・プラーナの神々：ヒンドゥー教の神々。人格神。民衆信仰に起源。
- トリムルティ（三位一体）：宇宙の創造・維持・破壊を司る 3 大神

1. ブラフマー（＝梵天）：宇宙の創造。妃サラスヴァティー（＝弁才天）。
2. ヴィシュヌ：宇宙の維持。妃ラクシュミー。
3. シヴァ：宇宙の破壊。妃パールヴァティー（ウマー＝ドゥルガー）。

2. 宇宙の生成と消滅

- 四つのユガ。1《神》年＝360《人》年。1 マハー・ユガ=12000《神》年＝432 万《人》年。（1000 ユガ＝1 カルパ（kalpa、劫）とされる。「未来永劫」「億劫」）

① クリタ・ユガ（＝サティヤ・ユガ）：正法（ダルマ「達磨」dharma）の時代。4800《神》年。（dharma＜語根 dhṛ「支える」：宇宙・社会の秩序、法則、法律、正義、義務、徳、宗教）
② トレーター・ユガ：正法の 4 分の 1 が欠ける時代。3600《神》年。
③ ドヴァーパラ・ユガ：正法が半分欠ける時代。2400《神》年。
④ カリ・ユガ：正法の 4 分の 3 が欠ける。現代。1200《神》年。

3. 仏教とヒンドゥー教の宇宙の違い

- 仏教：創造主なし。「衆生」の「業」によって生成・消滅。
- ヒンドゥー教：宇宙は神によって創造・維持・破壊される。時間とともに法が減少。

4. アヴァターラ（avatāra）：ヴィシュヌ神の 10 の化身・転生（ヴィシュヌ信仰）

① 魚（マツヤ）（クリタ・ユガ）
② 亀（クールマ）（クリタ・ユガ）
③ 猪：ヒラニヤークシャを倒す（クリタ・ユガ）
④ 人獅子（ナラシンハ）：ヒラニヤカシプを倒す（クリタ・ユガ）
⑤ こびと（ヴァーマナ）：バリを倒す（トレーター・ユガ）
「巨大化したヴァーマナの三歩」（トリヴィクラマ trivikrama）
⑥ パラシュ・ラーマ（斧を持つラーマ）（トレーター・ユガ）
⑦ チャンドラ・ラーマ：「ラーマーヤナ」の主人公（トレーター・ユガ）
⑧ クリシュナ：「マハーバーラタ」の主要人物の一人（ドヴァーパラ・ユガ）
⑨ ブッダ（カリ・ユガ）
⑩ カルキン（カリ・ユガ）

5. 乳海撹拌の物語

乳海撹拌（Samudra manthanam）の物語
バガヴァタ・プラーナ、ヴィシュヌ・プラーナ、マハーバーラタなどに伝承
クリタ・ユガにおいてヴィシュヌ神が亀（Kūrma）の化身となる。

5.1 ドゥルヴァーサ仙（Durvāsa）の物語

ドゥルヴァーサ仙は狂気の誓いを立てて修行をしていた。神々を引き連れ、象アイラーヴァタに乗ったインドラ神に出会ったドゥルヴァーサ仙は、インドラ神に花輪を投げ与える。インドラ神は花輪を象の頭に載せるが、匂いを嫌った象は花輪を地面に投げつける。それを見たドゥルヴァーサ仙は激怒し、三界でのインドラ神の権力が地に落ちるよう呪う。神々が力を失ったのに乗じて、バリに率いられた阿修羅たちは神々に戦を挑む。劣勢の神々はヴィシュヌ神に助けを求める。

5.2 乳海撹拌

マンダラ山（Mandara、曼荼羅 maṇḍala とは異なる）を乳海（Kṣīrasāgara）に置き、蛇ヴァースキ（Vāsuki）を巻き付け、蛇の尻尾側を神々が、蛇の頭側を阿修羅たちが掴み、マンダラ山を

交互に回転させて、乳海を撹拌する。マンダラ山が沈みそうになったとき、ヴィシュヌ神が巨大な亀に化身して、山の底に潜り込み、下から支える。乳海撹拌を 1000 年続けた結果、様々な「宝石」（ratna）が乳海から出現する（伝承により 9 つないし 14）：

*毒
*月
法螺貝
弓
牝牛スラビー（Surabhī）、または、牝牛カーマデーヌ（Kāmadhenu）
*白馬ウッチャイヒシュラヴァス（Ucchaiḥśravas）
*四本牙白象アイラーヴァタ（Airāvata）
宝石カウストゥバ（Kaustubha）
*聖樹パーリジャータ（Pārijāta）、または豊穣の樹カルパヴリクシャ（Kalpavṛkṣa）
天女アプサラス（apsaras）
*幸運の女神ラクシュミー（Lakṣmī）または、幸運の女神シュリー（Śrī）
酒の女神ヴァールニー（Varuṇī）、または、不運の女神ジェーシュター（Jyeṣṭhā）
*神医ダンヴァンタリ（Dhanvantari）
*不死の霊薬アムリタ（amṛta）

5.3 シヴァ神の喉が青くなった理由

乳海撹拌の過程で世界を破壊する毒が出現したとき、世界を救うためにシヴァ神が毒を飲み込む。慌てたシヴァ神の后パールヴァティーがシヴァ神の喉を絞めて毒が体に広がるのを防ぐが、毒のためにシヴァの喉は青色に染まる。以来、シヴァ神は「青い喉を持つ者」（Nīlakaṇṭha）の別名で呼ばれるようになる。

5.4 ヴィシュヌ神にだまされた阿修羅たち

乳海撹拌の最後に、アムリタを入れた壺を持った神医ダンヴァンタリが出現する。阿修羅たちは壺を奪うが、美女モーヒニー（Mohinī）に化身したヴィシュヌ神にだまされて壺を渡してしまう。神々はアムリタを飲んで力を回復する。

5.5 日食・月食が起こる理由

阿修羅ラーフ（Rāhu）は神に化けて神々の中に紛れ込み、アムリタを飲もうとする。太陽と月がそれを発見してヴィシュヌ神に告げる。ヴィシュヌ神はチャクラでラーフの頭を切り落とす。アムリタを口に含んだラーフの頭は死ぬことなく天空に逃げ出す。以来、ラーフは太陽と月を憎んで、機会を見つけては呑み込むが、ラーフは頭しか無いので、すぐに太陽も月も元に戻る。

5.6 ガルダがヴィシュヌの乗獣となった理由

ガルダの母ヴィナターはカシャパ仙の妻の一人。妻の一人で蛇（ナーガ）族の母であるカドゥルーと、白馬ウッチャイヒシュラヴァスの尻尾の色で賭をする。だまされたヴィナターはカドゥルーと蛇たちの奴隷となる。母ヴィナターの解放の対価としてガルダは神々からアムリタの入った壺を奪う。ガルダの勇敢さを称えたヴィシュヌ神はガルダを自らの乗獣（ヴァーハナ、vāhana）になること、蛇を食料にすることを許す。ガルダはアムリタを蛇たちに渡しヴィナターを解放する。しかし、蛇たちが飲む前にインドラ神がアムリタを奪い返す。鋭いクシャ草に落ちたしずくを舐めようとした蛇たちの舌は二つに裂けてしまう。

参考文献：今回の講義のテーマに関わるもの

1. 青山 亨.「叙事詩, 年代記, 予言:古典ジャワ文学にみられる伝統的歴史観」.『東南アジア研究』32巻1号. pp.34-65. 1994.
2. 定方 晟.『須弥山と極楽―仏教の宇宙観―』(講談社現代新書)講談社. 1973.
3. 定方 晟.『インド宇宙誌』春秋社. 1985.
4. 定方 晟.『インド宇宙論大全』春秋社. 2011.
5. 長谷川 明.『インド神話入門』(とんぼの本)新潮社. 1987.
6. 菅沼 晃.『インド神話伝説辞典』東京堂出版. 1985.
7. Dowson, John. *A Classical Dictionary of Hindu Mythology and Religion*. Org. 1894.